

## 紹介

HIROSHI MIZUTA : ADAM SMITH'S LIBRARY. A Supplement to Bonar's Catalogue

with a Check-list of the whole Library.

Cambridge University Press, for The Royal Economic Society, 1967. xix + 153p.

### —— 紹介と感想 ——

小 林 昇

「諒承を求めたい。」

わたくしは本書の紹介とそのメリットの指摘とを、さきに雑誌『経済研究』の一九巻一号のために書き、それが本誌のこの号よりもすこしさきに発表されるはずであるが、そこであたえられたスペースが小さかったため、原稿の作成には努力をしたもののまだ書きたりない点がいくつか残った。そこで別に本誌の紙面をいただいて、さきの原稿のやや十分ないわば拡大版を書くこととしたのである。『経済研究』には右の次第について

本書はアダム・スミスの蔵書目録の完成を目的とする、水田洋教授の多年にわたる努力の成果の、一半であり、かなりの部分がのちに散佚したスミスの没時の蔵書を、その点数ないし冊数について、今後の偶然に頼るほかはない極少の部分のをのぞき、ほぼ完全に近いところまで追跡しえた結果を示す編著である。はじめに予備的な範囲に限り、スミスの蔵書目録の作成史について一言しておくことが、本書の性質を知るうえに有益であ

ろう。スミスはその生前に、しかも『国富論』の公刊の年からわずか五年後という一七八一年に、自分の書庫の目録をつくらせており、その唯一の原本が東京大学のアダム・スミス文庫（スミスの蔵書の一部）にある。それには約一一二〇点・二三〇〇冊がふくまれているが、スミスの蔵書はその後に数を増して、一七九〇年の没時には約一六〇〇点・三〇〇〇冊に達したと見られる。このスミス文庫は一八七八年にいたってかなりの部分が散佚するのであるが、James Bonar は、この散佚という事実にながされて、一八九四年に *A Catalogue of the Library of Adam Smith* を公刊した。これはきわめて不十分なものであり、当時おそらくはまだアイルランドにあった、東大所蔵の一七八一年の目録をも知らずに作成されている。スミス文庫はそのあとでもう一度相当の冊数が所有者を変えるが、それは他方では右の目録の発見をも伴ない、ボナーはこんどは東大から送られたそのコピーを見、同時にその後の追求をも加えて、一九三二年にその *Catalogue* の増補版を出した。それには約一一〇〇点・二二〇〇冊がふくまれている。

それ以後、ボナーは二回にわたって *Economic Journal* 誌上に新增補を発表したし、アメリカに移った部分のスミス文庫についても別に二つのかなり重要な目録の発表があった。一方東京大学のスミス文庫は、一七八一年の目録の復刻を付録に加えて、*A full and detailed Catalogue of Books which belonged to Adam Smith. Now in the possession of*

*the Faculty of Economics, University of Tokyo. With Notes and Explanations. By Tadao Yanahara* とし、一九五一年に岩波書店から刊行された。（以下ではこれらの文献のうち、スミス生前の目録を「旧目録」、ボナーの著書の第二版を『ボナー・カタログ』、東大の目録を『矢内原カタログ』と呼び、ここで対象とする水田氏の編著を『水田目録』と呼ぶこととする。）——そこで、スミス文庫のハンターとしての水田氏の仕事は、第一に『ボナー・カタログ』以後報告されたこのカタログへの追補分を集大成し、あわせてイギリスでみずから新たな追補分の発見につとめること、第二に、『ボナー・カタログ』の記載はさまざまな点での欠陥をきわめて多くふくんでいるので、現物にその所蔵場所であたって（あるいは現物とおなじ書物を図書館であたって）、この欠陥を正すこと、が内容となる。記載の形式が簡単にすぎる「旧目録」の厳密化という困難な仕事も、右の第二の作業とかさなる部分が多いわけである。

したがって、この『水田目録』は、『ボナー・カタログ』のサブメントというかたちをとっているかぎり、右の二つの仕事のうちの第一の仕事だけを報告するものである。だからそれは、スミス文庫を追求した水田氏の全成果の一部を示すものにすぎない。われわれはまずこのことを認識しておきたい。第二の仕事の成果は別に、同氏の書いた「アダム・スミスの蔵書」（アダム・スミスの会、大河内一男編「アダム・スミスの味」、東京大学出版会、一九六五年。二二五—三〇三ページ）にまとめられてい

る。『水田目録』はその後半部に、『ボナー・カタログ』、『旧目録』、『水田目録』自身の三者の収める書目を著者名アルファベットに従って総合的に記載し、これに、この三カタログのそれぞれでの記載ページを並記している（これが『水田目録』の副題のいう、Check-list of the whole Libraryである）が、並記の必要から、ここでは書名はできるだけ短縮しかたたちで記載されているため、この Check-list は『ボナー・カタログ』と『矢内原カタログ』との所有者にとってはきわめて便利であるとはいえ、水田氏の第二の仕事はここにはほとんど示されていない。すなわち水田氏の完成した「総カタログ」は、一冊の本としては、あるいは一つにまとまったかたちでは、まだ公刊されていないわけなのである。

ところで、偉大な思想家の蔵書目録というものは、研究者にとってどういう意味を持つのであろうか。——『ボナー・カタログ』はその複製版が例の A・M・ケリー社から一九六六年に出版され、入手しやすくなっているが、その introduction はスミスの肖像についての記述やスミスの母の肖像の写真までをふくみ、この本がある程度まで好事家の仕事という性質を持っていたことを感じさせる（そういう意味では、いつもながらケリー社の複製本が原典の装幀と造本との持つ香気を完全に無視していることは、ボナーにとってはやや皮肉な結果となつた）。しかしわたくしの知る水田氏は、積極的にどう呼べばよいかはむずかしい問題ながら、好事家というタイプでないこと

はたしかである。その水田氏がなにごとにながされてスミスの蔵書目録の完成にその辛勞と時間を捧げることになったのであろうか。そうしてその結果は何をスミス研究と社会科学の研究とに加えたのであろうか。右の第二の設問は、とうぜん、わたくしが本稿で『水田目録』の紹介を終えてからその答えを考えてみるべきすじあいのものである。しかし第一の設問については、ここで省みておくことが便宜であらう。

ただし、蔵書目録というものの内容と効用とは、蔵書の主によつてさまざまであり、それらを一概には取り扱えない。下村寅太郎氏が Arthur Warda の *Immanuel Kants Bücher, 1922* に従って述べられているところによると、カントは五〇〇冊の書物を残したが、蔵書家でも愛書家でもなく、必要な本は友人や出版社から貸してもらい、したがって手もとには寄贈本だけがふえたが、それらも多くは友人に寄贈された。蔵書の相続者 Prof. J. E. Gensichen が人に答えたものによると、この相続財産のなかには『純粹理性批判』以前のカント自身の著作も、『実践理性批判』すらもないそうである（右のゲンジンヘンの蔵書の売立てにあたつてつくられた、独立のカント文庫の目録の複製（未来社）に付された解説）。観念論の哲学者カントのこういう態度も立派だといえよう。それにもかかわらず、こういう性質の文庫に対するワルダのような追求者もいるのである。——貧困と戦いながらおもにブリティッシュ・ミュージアムその他の図書館の本を利用したマルクスの場合には、

蔵書目録の作成ということは、いっそう問題とならず、そのかわり続破した本の抜萃ノートの堆積が、これは異論のない意義を持つてゐる。このノートの利用が今後進められれば、マルクス経済学の形成されたいわば精神的工場での作業工程がますます明らかとなるであらう。カントやマルクスの場合に反して、一橋大学が所蔵するカール・メンガーの文庫は、周知のように質量ともにきわめて優秀であり、しかも散佚のないこと(ただし一橋大学のものがメンガーの旧蔵書の社会科学と Ethnographie との二部門を網羅しているという意味であつて、文学と自然科学との部門に属するものの運命についてはわたくしは知らない。哲学部門のものはシカゴの Midwest Inter-Library Center にあるそうである——林治一『オーストリア学派研究序説』二〇ページ)、保存の良いこと(その反面で利用条件は不十分である)、ていねいな蔵書目録がつくられていること、などの点で卓越している。ところがこの文庫は、古典の図書館といったかたちで書物の現本が利用者の用に供されているのであり、したがつて蔵書目録も図書館の目録にことならない。そうして、メンガー自身が後半生に樹立を意図したといわれるより、新しい社会科学の体系は、一つには文庫が尨大でまた模範的なために、二つにはメンガーがその著名な主著と方法論との公刊以後目ぼしい文献を残さなかつたために、彼の文庫からはうかがい知ることができないのである。

だが、スミスの蔵書目録はこれらの場合とは意義がことな

る。彼は蔵書家でありまた愛書家であつた。愛書家だったゆゑに本に書き込みをしなかつたし、自著の『国富論』にもそれがないようだから、この点は例えば右のメンガーやジェイムズ・ステュアートの主著のばあいとちがうし、スミスがその蔵書のなかのどれに目を通したのかも判明しない。また一般の場合と同様に、彼が蔵書以外に読んだ本についても確定はできない。しかし、人も知るように、スミスは孤独を愛する性格であつたし、ことにカーコーディで『国富論』を執筆した長い期間ほとんど隠棲の生活を送つたのであつたし、この期間の生活のために、グラスゴウの教授時代に読んだ大学の本とおなじものをあらためて購入したということであるから、すくなくともスミスは、自分の研究のために最も多く自分の蔵書を利用した学者の一人だつたといえるであらう。ことに、『国富論』の刊行を遠く隔たらしめ時期にみづからつくらせた「旧目録」が総カタログの中核となつてゐることは、重要な意義を持つことといわなければならぬ。ここに、できるだけ完全なかたちでスミスの蔵書目録をつくらうとした水田氏の努力がつよく是認されるべき根拠があるのである。——これ以上のことについては、さきの第二の設問にかかわることとして、本稿のおわりで二、三の実例をスミス文庫から拾いつつ関説するであらう。

## 二

スミスはその愛惜した蔵書のすべてを、若いときの David

Douglas に遺贈した。のちに議会に出い Lord Reston となり、Lord of Justiciary をつとめた人物である。『ボナー・カタログ』の初版は、マッカロックが右の遺贈本を見て五〇〇冊ほどあると見当をつけたことを、その序文にしている。p.viii、矢内原氏が『矢内原カタログ』作成の以前に「旧目録」の収載冊数を五〇〇冊と述べているのは（『東大経済学部所蔵アダム・スミス蔵書について』、『アダム・スミスの味』所収、二〇三ページ）、無意識にこれに影響されたものであらう。『水田目録』の Introduction も「旧目録」についていちおうこの数字を引用している (p.xi)。しかし、できあがった『矢内原カタログ』では、「旧目録」のふくむものは約一一二〇冊・二三〇〇点と正しくしている。そうして上述のように、また後述の理由から、D・ダグラスに譲られたスミスの全蔵書はほぼ三〇〇〇冊と推定されるのである。ボナー自身の推定もまたそのとおりであった（『ボナー・カタログ』初版、同右ページ）。Dugald Stewart はこれをそのスミス伝のなかで、「ひじょうに判断のよい選択をもってしだいにくりあげた、小さいがすぐれた文庫」だと述べている。すべての本にはきわめて簡素な蔵書票が貼られており、保存状態は良好で、たいていの本がぜいたくを避けながらも革で製本されていた。スミスは上質な文庫を持ち、その価値を人に誇ったこともあり、おそらくはそれを十分に利用したのである。

D・ダグラスは一八一九年に没し、スミスの蔵書は彼の二人

HIROSHI MIZUTA: ADAM SMITH'S LIBRARY

の娘 Mrs. Cunningham of Prestonpans と Mrs. Bannerman of Edinburgh とのあいだに、等分に分けられた。前者がいわゆるカニングラム・コレクション、後者がいわゆるバナマン・コレクションである。D・ダグラスの生前にはスミス文庫の散佚はほとんどなかったし、バナマン・コレクションとなったものからの散佚もこんにちまでほとんどない。すなわちバナマン・コレクションはミセス・バナマンの死によって息子の David Douglas Bannerman at Perth に譲られ（一八七九年）、彼はこれを一八八四年と九四年とに、すべてエディンバラの New College (of the Free Church) に寄贈したのである。だがこのニュー・カレッジでのスミスの蔵書の保管状態は良好でなく、紛失したものがあるおそれもあるし、未確認ないし未知の蔵書が今後発見される可能性もある。この場所での水田氏の労働の量は再度にわたってきわめて大きかったが、カレッジ自身による保管方法の改善と正確な目録作成とがつよく要請される。スミス文庫の散佚の歴史——同時にスミスの蔵書目録の作成の必要——は、ミセス・カニングラムの夫 W. B. Cunningham of Prestonpans の死（一八七八年）からはじまる。このときに、未亡人はカニングラム・コレクションの一半を売りに出した。こうして売られた書物のうち、一部分は Prof. Hodgson が買い、それは Mrs. Hodgson によって一八八〇年にエディンバラの Old College の図書館の寄贈され、一部分は Prof. Nicholson が買って、六冊をカーコーディのミュージアムに寄贈

し、四冊を一九二六年の死にいたるまで所蔵していた（その後のことは未確認だと思われる。しかし書名の確認されている蔵書の所有者の変更をいっいち追うことは、『水田目録』の Introduction がいうとおり、may be worth nothing である）。そのほかのものは、ボナー自身が買い集めて一九三一年にグラスゴウ大学に寄贈した十数点、Prof. Foxwell がその蒐集に加えた相当大きい部分、Henry Higgs とカール・メンガーとの所蔵に帰した各一点、等々……に分離して、グラスゴウ大学に入ったもの以外は、さきのニコルソンの所蔵本をもふくめて、その後の新しい定住なしい散佚の歴史をつくるのである。もとより『ボナー・カクログ』の第二版があげているスミスの文庫の所蔵者ことに個人の名のうち、第一版に掲げた所蔵者のなかには見当らなかったものは、すべてが新たな第二次の買手を意味しない。第一次の買手の所蔵本であって第二版が新たに収録した本もあるはずである。なお、メンガーの所蔵に帰した一点は、一橋大学のメンガー文庫にはふくまれていない。またニコルソン所蔵のうちの一点は、Prof. W. R. Scott の有を経て大河内一男教授がロンドンの古書店で発見し、いまでは東大のスミス文庫に加えられている（『アダム・スミスの味』三二―一四ページ）。

これらのうち、フォックススウェルの文庫に入ったものは、個人所蔵のスミス文庫としては点数の多いことで重要であったが、はやくロンドン大学の Goldsmith's Library とハーヴァー

ド大学の Kress Library とに分れて所有を移した。『ボナー・カクログ』はこの後者への経路を知らなかった。しかし水田氏はその追跡の過程で、『ボナー・カクログ』の記載に漏れた旧フォックスウェル蔵のスミス文庫がゴールドスミス・ライブラリにあることを発見する一方、スミス文庫のこの後者の部分にかなり行方不明の点数があることをも確認している。

スミス文庫のこうむった第二の大きい散佚は、カニングム・コレクションの残りの部分について、一九一八年におこった。同コレクションの一八七八年の売立てのあとで、残された部分はミセス・カニングムの息子 R. O. Cunningham が相続したが、このカニングムはベルファスト大学の教授（——）であって、その相続した分のスミス文庫の一部を生前にベルファストの Queen's College（現在 Q. University）に寄贈し、その他の相当の点数は、一九一八年七月に彼が没してから、所在を一時不明にしていたのち、やがて貴重な「旧目録」をふくむ一四一点・三〇八冊にまとまったまま、一九二〇年にロンドンの Dulau & Co. から新渡戸稲造博士の手に入り、東大に新設の経済学部に寄贈されたのであった。ベルファスト大学の所蔵分が一〇〇点に達しないことを知れば、東京大学のスミス文庫が R. O. カニングムの相続したコレクションのなかの主要部分であることがわかる。なお、のちにもう一点、不明の理由で新渡戸家に残されていたものが東大のスミス文庫に加えられた。けれども、一九一八年から二〇年までのあいだにカニング

ム・コレクションがたどっていた運命は十分明らかではなく、わずかの散佚がこの期間にあったかもしれない(J. Viner, *Guide to John Rae's Life of Adam Smith*, 1965, pp.119—20)。

ところで、ちかのはってスミスの晩年やD・ダグラスの生存中には、スミス文庫の散佚は皆無だったのだろうか。ジェイコブ・ヴァイナーは右に引用した、レーのスミス伝の復刻版への長大な解説のなかで、*Museum Book Store* (ロンドン?) からジョンズ・ホプキンス大学に買われて一九一二年にアメリカに渡ったスミス文庫の一部をしらべたところ、「それらの全部ないし多くが、レストン卿(D・ダグラス)の、あるいはそれどころかアダム・スミス自身の所有であったあいだにアダム・スミス文庫から出て、相当な大きさだったとも考えられる、これまでに思えばなかった散佚からのもの」だったかもしれないと述べて、今後の調査に期待している(*ibid.*, p. 127)。ちなみに、京都大学図書館で出口勇蔵教授の発見された、従来は未知の一点二巻のスミスの蔵書も、このミュージアム書店で(ただし一九一八年十一月という微妙な時点で)購入されたものである(『アダム・スミスの味』三〇五—二二ページ)。また『水田目録』は水田氏自身の発見による、グラスゴウのH. Livingstone所蔵の六冊のスミス文庫——のちグラスゴウ大学に寄贈——を収めているが、氏の上掲の「アダム・スミスの蔵書」によると、そのうちの五冊はD・ダグラスの手から出たものとしか考えられないという。

また、ヴァイナーが『ボナー・カタログ』に拠って留意をうながしているところによると、レディング大学蔵のスミス文庫の一冊は、カニングム家から一八五四年、すなわち第一回の売立てよりも遠い以前に、マッカロックに譲られたものであるし、グラスゴウ大学はロンドンの一書店から一九〇三年、すなわちカニングム家の第二回の売立てよりもはるかまえに、スミス文庫の二巻のバークリー全集を購入している(Viner, p.125)。ヴァイナーはさらに、このバークリーがすでに一八二七年にカニングム・コレクションを出たという推定をしているが、この事実はまだ確定しがたいようである。

以上のところから知られることは、スミス文庫は一部散佚しつつも他方でその大きい部分が再定着し、結局現在のところ、イギリスではエディンバラのニュー・カレッジとオールド・カレッジ、グラスゴウ大学、ロンドン大学(ゴールドスミス・ライブラリ)、ベルファスト大学、日本では東京大学、アメリカではハーヴァード大学(クレス・ライブラリ)とジョンズ・ホプキンス大学とが所蔵者の大どころということになり、カーコデーのミュージアムがハーヴァードにつぐ規模の所蔵者となるであろう。アメリカに渡ってHollander, MacGarveyらの個人所蔵に帰したものは三冊にすぎない。イタリアにはLuigi Einaudiの遺した文庫が一冊をふくんでいて、P. Saffiaから水田氏に報告された。アメリカでのスミス文庫の内容は、いちおうMacGarvey, *Notes on Adam Smith's library and the*

Bonar catalogue 1932, *Economic Journal*, 1949 及び *The Vanderblue Memorial Collection of Smithiana... in the Kress Library of Business and Economics, Baker Library, Harvard Graduate School of Business Administration*, 1939 によって知ることができる。——スミスの文庫は、今後に確認と再発見とをも期待させるし、ことにエディンバラのニュー・カレッジでの整理の必要を水田氏の調査が反省させた意義は大きい。ヴァイナーは、「旧目録」がスミスの書庫にあった本だけのカタログであって、他の部屋にも保管された分があつたかもしれないと推測をしてみせているが (Viner, p. 124) 、「そういう可能性の夢を描くことも、経済学史・思想史の研究者の抱きうる楽しみの一つであらう。事実この研究領域では、つねに未見の旧文献の発見がおこっているのである。スミスの文学講義のノートの最近における発見も、その一例にはかならない。

## 三

水田氏は三度イギリスとヨーロッパ諸国を訪れている。一九五四年秋から五六年春までと、五九年の夏から年末までと、それに六二年の春とだつたと思う。最初の旅行は『社会思想史の旅——イギリス——』を生み、二度目と三度目との旅は『霧の国太陽の国』を生みだして、わたくしはことにはじめの旅行記を愛惜している。この最初の旅のさなかに、水田氏は福島大学

の『商学論集』(二四卷三号) に「アダム・スミスのあとをおつて」という通信を寄せているが、それは、「カレドニア放浪記」という副題が示しているように、水田氏がそのころはまだスミスの文庫の追求に本腰を入れていないことを知らせる。むしろ、スコットが発見したとみずから書いた「エディンバラ講義草稿」の、謎となつてしまつた後半部の探索——その努力は残念ながら実らなかつたけれども——に、最大の関心が向けられていたようである。もつとも、思想家としての水田氏の関心はいつもきわめて多面的であつて、それが氏の旅行記を楽しくもまたややわずらしくもしているのだが。

ところが、氏の帰国後、「スミスのあとをおつて」の一年のちに出版された『社会思想史の旅』(一九五六年) では、やはり他の関心と並行しながらも、スミス文庫の追求が氏の最初のイギリス滞在の後半期にいちじるしく進展したことが示されている。この本の二七—三〇ページには、簡単にながら、氏がブリティッシュ・カウンシルの援助をえて、ベルファスト、エディンバラ、ロンドンの各大学のスミス文庫を点検したこと、その結果、『ボナー・カタログ』にない蔵書を予期以上に多く発見したこと、さきにあげたリヴィングストン所蔵のスミス文庫六冊を発見したこと、カニングهام家の裔の Miss Cunningham の住所をついに探しだして若干の情報をえたこと、などの収穫が報告されている。

だが、そこでもふれられているように、水田氏はすでに帰国



後ただちに、五六年の五月と十一月との二度にわたって、おなじく前掲の『商学論集』の二五巻一号と三号とに、「アダム・スミスの蔵書」という長文の調査報告を発表した。これがのちに、すでにしばしば引いた『アダム・スミスの味』のなかの「アダム・スミスの蔵書」となっている。ちやうど完成し、また『水田目録』の最初の基礎ともなったものである。水田氏はここではじめて、『ボナー・カタログ』の遺漏とさまざまな欠陥とをするべく指摘しつつ、このカタログをば、イギリスにあるおもなスミス文庫に直接にあたったりまたアメリカからの報告とも照合して、徹底的に検討し確認し修正し追加するという、困難な仕事に立ち向い、幾点もの、またいろいろな性質の新発見をも加えつつ、すでに大きい成果を示したのであった。『スミスの味』のほうの報告に示されているように、「ボナー・カタログ」はスミス文庫の現物にできるだけあたるという労をとったかどうかという大切な点で疑いを残し、したがって水田氏の結論としては「それが全面的に信頼しうるかどうかをあやぶむ」(二三二ページ)ということになり、このために右のような氏自身の労苦が払われなければならないわけである。

『商学論集』に掲載された「アダム・スミスの蔵書」の抜刷はイギリスの関係者に贈られ、それがP・スラッファの目にとまって水田氏の再度の渡英に便宜があたえられ、氏の仕事はいちだんと進むことになる。名古屋大学の水田氏の原稿が福島大学の『商学論集』に載ったのは、この雑誌が日本の大学の

機関誌としては例外的に解放的であるからである。福島大学外に所属する新鋭な諸研究者の労作が一編、たいいていの号には載ることになっている。最近の三六巻二号には会津短大の上野喬氏の「ヨハン・ヨアヒム・ベッヒャーの政治経済思想について」(64p.)が掲載されている。わたくしは『商学論集』がスミス研究に、ひいては学史・思想史の研究に、水田氏の仕事の掲載によって果たした貢献をとくに認めておきたいと思う。

『アダム・スミスの味』のほうの「蔵書」のおわりの部分には、水田氏が二度目の訪英のさいの探書の成果を『エコノミスト』の一九六〇年二月九日号に書いた文章が、加除修正して加えられている。すなわちその二八六ページ以下である。それによれば、『商学論集』に載せられた「蔵書」の抜刷は、『ボナー・カタログ』の増補リストを水田氏が *Economic Journal* の別冊付録としてまとめてみてはどうか、そのためにブリティッシュ・カウンシルが若干の経済的援助をする、という勧めをおこさせたのだそうである。ところがそれに関連して、もともと略記されている東大蔵の「旧目録」が完全なものにカタログイングし直されなければならない。この作業が一貫して掘ることのできる手引きを持たないこと、アメリカは別としてもほとんど全西欧の大きい図書館を利用しなければならないことは、スミス文庫の内容から当然に予想されることである。その困難さは想像に余りあるのであらう。しかし水田氏はこの作業にふみ切り、必要なときにはただちに「厳格な文献学者」に変身するス

ラッファの鞭によく耐えたりえ、バリ、ジュネーヴ、ボローニヤ、ローマ（およびヴァティカン）をまで訪れ、とうとうこの難事をいちおう仕上げた。ボーマルシェの『フィガロの結婚』のタイトルの一字をたしかめるために、ロンドンからエディンバラまで出直し、援助を受けた百ポンドのうちの七ポンドを使って、結果は文句をつけたスラッファに降参したなどというエピソードも語られている。これは意地っ張りの水田氏も明白な事実のまえには敗退したという事例である。なお、水田氏の一九六二年の訪英で仕事はいちおうかたまるのだが、このあとにも、滞英中の折の杉山忠平氏がスラッファとのなかに立って日本にいる水田氏を助けられた期間がある。——スラッファの鞭と協力との特有の態度は、『霧の国太陽の国』にも、水田氏らしい強い神経で描かれている。彼は水田氏に、エウナウディ蔵の一冊のスマス文庫のあることを教えてくれたり、わずかのスマス文庫をふくむ Rotschild Library のカタログ（一九五四年）のことを教えてくれたりしているが、何よりも、水田氏につくった『ボナー・カタログ』への増補目録の原稿を全部たねんに検討してくれたのであった。

こうして、スマス文庫に対する水田氏の執拗な追求は、日本人としてはほぼつくすべき手段をつくして帰結に達し、その一半が、当初の予定であった *Economic Journal* の別冊付録というかたちではなしに、イギリスふうの香気にみちた独立の書物としていま公刊されたのである。しかも前述したように、後半

に General Check-list をつけるというめんどうな作業をさらに付加したうえでこの運びとなったのであった。

新しく世に出た『水田目録』は、「探書十年の旅の終りに」(p. xiv)、『ボナー・カタログ』に約四八〇点の正確な目録を付加した。『ボナー・カタログ』には前述のように、約一一〇〇点・二二〇〇冊が収められているのだから、ボナー自身のその後の努力をもふくむ、各方面からの報告と発見とに水田氏自身の発見をも綜合して、『水田目録』は『ボナー・カタログ』にその約四四パーセントを追加したことになる。両者の合計は「旧目録」の総点数一一二〇を越えるが、『水田目録』の点数を二倍弱にした九〇〇をその冊数とすれば（むろんほぼ正確な数字は数えてみればわかる）、『ボナー・カタログ』と『水田目録』とを合計した総冊数は、スマスの没時の彼の文庫の推定冊数としてこの文章のはじめにあげた、三〇〇〇という冊数をさえやや上廻ることとなる。むろん、完成しつつあるスマス文庫の総目録は、すでに行方を見失った本をふくむけれども、この場合に必要なのは実物よりもむしろ書名——これが正確に分ればおなじ本を探すことができる——なのであるから、この総目録の作成史における『水田目録』の意義は、当の『目録』が達成している範囲だけにかぎっても、きわめて大きいといわなければならない。

ちなみに、スマスの文庫の冊数を、ヴァイナーはつぎのように試算している。すなわち——彼による、『ボナー・カタログ』

の総冊数はまず二二四〇、そのなかでバナマン・コレクションからのものとされる冊数が一四〇〇、カニングラム・コレクションをこれと同数と見れば合計で二八〇〇冊。そこで一八七八年のカニングラム家の売立てで散佚したものが五六〇冊となるが、そのうち一〇〇冊近くのものでボナーの録さなかったものの所在がこんにも判明しているから、四〇〇冊以上が、「旧目録」での収載が確認されないかぎり不明にとどまっている、というのである (Viner, p. 121)。ヴァイナーのこの試算は一九六五年に発表されたものであるが、『水田目録』の追加冊数は四〇〇冊を大きく越えており、それはヴァイナーの推定を訂正するとともに、スミス文庫の規模の大きさとその散佚の歴史の複雑さとを物語っている。このことは同時に、今後の新発見の可能性をも知らせるということができるであろう。

『水田目録』がスミス文庫について確認と発見との点で果たした貢献と功績とのいちいちについては、水田氏自身による「*Adam・Smithsの蔵書*」と『水田目録』の Introduction とが客観的事実として報告しているから、ここではそれを再現しないことにする。水田氏自身にとっては、実行したいことがなおいくつか残っているであろう。アメリカの現地での確認、個人所蔵者の文庫の実見、ミス・カニングラムの所蔵物の点検、現本に即しての「旧目録」の完全化のいっそうの進行、などの課題はまだ水田氏の意識にとどまっていると思われる。ことにアメリカでのスミス文庫については、さきにヴァイナーの述べた

ところから知ったように、スミス文庫の古い時期の散佚を語るものがあるようだし、フォックスウェル所蔵のスミス文庫のうちの一部のゆくえの問題も残されていることだから、氏の旅情は新たにアメリカに向っているかもしれない(もともとこの場合は入国の問題があるだろうけれども)。しかし、われわれが望みたいことは、この段階となつてはむしろ、スミス文庫の追求にあたった水田氏の全努力が一つの本にまとまること、すなわち『水田目録』と「*Adam・Smithsの蔵書*」とが合して一冊のカタログの形をとり、スミス文庫の目録の決定版としての『水田カタログ』が公刊されることである。

この場合には、現『水田目録』の後半を成す General Check-list は不用と化するであろう。だが一方、もしそれを検討してみても有意義と思われるときには、スミスの諸著作や彼の講義ノートが——といってもおもに『国富論』が——さまざまなかたちでながらそのなかで援用している諸文献のリストと、いろいろな文献の証拠からスミスが読んだことの確定できる書物——例えば Pultney あてのスミスの手紙から知られる James Stewart の *Principles*——のリストとが、付録とされればきわめて便利であろうと思われる。それらはスミスの読んだ本についてスミス文庫の総目録を補うことがあるであろうし、とかくキャンバン版の『国富論』にのみ拠りがちのわれわれ研究者の目を洗うという効用をも持つであろう。『水田目録』は現在グラスゴウを中心に進行中の新しいスミス全集の別巻に収められる

可能性もあるようだが、イギリス人の立場からすれば、水田氏の仕事をあくまでボナーの仕事の「補遺」として受けとりたいであろう。しかし、わたくしは新スミス全集の編集者たちがつと前進的な態度をとることに期待したいし、一方では日本で決定版のスミス文庫のカタログが出せる用意をも、水田氏と学界とが進めることを願いたい。（ちなみに、『*The Economist*, June 3, 1967 は『水田目録』の短評をにかけて、大きい讃辞を呈する一方で、この『目録』が、水田氏の発見した details of some altered locations of some books in Bonar's catalogue をふくんでいないことをその欠陥として指摘している。この批判の表現は正確ではなく、問題はむしろスミス文庫の所蔵者の変化にあるのではない。だが一方、この評言からすれば、「蔵書」をふくむ完全な『水田カタログ』の出版もイギリスでは歓迎されそうでもある。）

## 四

スミスの蔵書の内容は、いかに広い知的基盤とするごい実践的感覚とから『国富論』が成立したかをわれわれに教える。その詳細な検討は、社会科学と社会思想との歴史に大きい光を投ずるであろう。しかし、現在の内外の学界はそこまでは十分に手を届かせていないし、ことにラテン語の知識に欠けるわたくしは、いまのところこの仕事に参加する資格がいちじるしく不足している。

スミスは母国語以外には、ラテン、フランス、イタリアの諸語を読んだことがその目録からわかる。ギリシャ語はこなせなかったようだし、ドイツ語は読めなかったといつてよいであろう。文庫には『道徳感情論』と『国富論』とのドイツ訳があるだけである。スミスは「ステュアートとはちがって、カメラリストたちの世界には接触しなかった。そうしてこれと反対に、重農学派およびその周辺との接触は密接である。『エフェメリド・ドゥ・シトワイヤン』、メルシェ・ド・ラ・リヴィエール、ル・トロース、ミラボー侯、ケネー等（以下アルファベット順）は『旧目録』にある。その他のフランス経済論者の著作には、コンディアック、フォルボネ、ムロン、ネッケルがあるし、農学者デュアメル・ドゥ・モンソーのものが、本家のタルの著作とともにある。カンティロンがあるのはむしろである。いわゆるスコットランド歴史学派およびその周辺を形成した、スミスと同国の同時代人のものともより揃っているが、とくにケイムズの著作は『水田目録』でよく整理された。ひろい意味で急進主義的な同時代人々の仕事にも大きい関心が払われている。コンドルセ、ルソー、ブライス、ブリーストリらが相当収蔵されているのである。

しかし、これらの人々の書物は、広汎な歴史・地理・文学・哲学・法律・自然科学、および思想上の代表的諸古典のなかのわずかな部分にすぎない。『矢内原カタログ』は自己の内容を「The subjects of these books cover the wide range of

philosophy, geography and topography of various countries, travels, natural history, religion, art of war, language, mathematics, etc., but, no book on economics.”とつづねいに分類しているが、このカタログを成す部分は特別としても、『水田目録』も、『ボナー・カタログ』の示したスミス文庫の性格を変えるような印象をあたえるものではけつてないものである。

ところでなお注目すべきことであるが、スミス文庫はイギリス・マーカーンティリズムの一級の文献についてはかならずしも網羅的ではない。チャイルド、ダヴナント、デッカー、ジー、ハリス、ロー、マン、サー・ウィリアム・テンブル、ステュアート、タッカー、さらにそれらに加えるとすればボッスルスウエイトラがおもなもので、しかもこれらのうちタッカーはもう重商主義者とはいえない。そのうえ、ここにはチャイルズ・キングの *British Merchant* や、ロックの著名な『利子・貨幣論』などがなくて、保護主義的重商主義＝本来の重商主義の文献はかなり手簿である。——もっとも、『国富論』ではロックの右の本は読まれたはずであるが。（これに対してラウンズの著作は一冊ある。）ステュアートは、わたくしの見解では、統制主義者ではあっても保護主義者ではない。また、スミスに直接つながる自由貿易論の淵源とわたくしの考える、ダニエル・デフォールの経済上の著作も見あたらないし、一方、いわゆるトリー・フリー・トレードの有力な代表者、バーボンとノース

との著書もない。さらにややふしぎなのは、スミスの思想的源流の一つであるヘンドヴィルの *The Fable of the Bees* が『旧目録』にもなくて、『ボナー・カタログ』がわずかに、William Law, *Remarks upon a late Book intitled 'The Fable of the Bees', 2nd ed. 1725* を掲載しているだけだということである。

もっとも、スミスとタッカーとの関係の密接さをスミス文庫が示しているのは興味深い。「旧目録」は三冊のタッカーの本を記載し、『ボナー・カタログ』は十一冊を記載する。そうしてそのなかに、「旧目録」は載せないが、タッカーが私家版として友人に配った、最も稀覯な *Instructions for Travellers*, 1758 の存在することは注目すべきである。所蔵はグラスゴウ大学となっている。ただしボナーの記載は、書名の *for* が *to* になっていたり、そのほか確認してみたい点がある。この場合『ボナー・カタログ』が正確ならば、この本は現在四冊世界に残っていることとなるのである（筆者著『重商主義解体期の研究』六九ページを参照）。

スミスの文庫について右の程度のことをしるしてみても、たいたい意義はないであろう。ただ、『国富論』の成立史のいわば内部構造を窺うという意味において、文庫の検討から知られるつぎの一事はなにほどの注目に値するようと思われる。——周知のように、『国富論』は商品の交換価値の分析の入口にあたって、この交換価値と使用価値との乖離ないし相反の事実を

指摘し、ここから、交換価値の「真の尺度」として使用価値を採ることを捨て、ともかく労働価値論へとすすんでゆく。そうしてこの場合、これも周知のように、水とダイヤモンドにおける交換価値と使用価値との相反という例を示すのであって、それはJ・ローとJ・ハリスとに先例を持つ挙例なのであるが、この挙例をふくむ両者の著書はすでに「旧目録」のなかにある。ところが、スミス以前に労働価値論の規定を示した三つだけの古典、すなわちベティの『租税貢納論』と、フランクリンの *A modest Enquiry into the Nature and Necessity of a Paper Currency*, 1729 と、匿名者の *Some Thoughts on the Interest of Money...*, 1738 (?) とは、どれもスミス文庫のなかに見いだされないのである。

右の三著の関係をみると、フランクリンがベティを読んだことはほぼ推定できるし、おなじ前者がスミスと直接に知り合っていたことも推測できる(久保芳和『フランクリン研究』を参照)。しかしスミスは、第一に、「政治算術」には不信の念を持っていた(『国富論』第四編第五章)、ベティの諸著はその文庫に一冊もないし、第二に、フランクリンの著書は「旧目録」以来三冊を所蔵してはいたが、上掲の *A modest Enquiry* はいままでに見当らないし、第三に、匿名者のきわめて時局的な論説であった稀覯の *Some Thoughts* …にいたっては、スミスの文庫が収蔵していないのはむしろ当然であるといえよう。ミークはスミスがこの匿名書を知っていたはずだといっているが(R. L.

Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, p.43) それは強弁であって、むしろ証拠も示されていない。そうして何よりも、これらの三著のなかで労働価値論の規定がそれぞれおかれている体系的な位置と、それが主張されている場合の実践的な目的とが、たがいに、また『国富論』での場合とも、異っている点に留意しなければならない(筆者著『原始蓄積期の経済諸理論』第一論文第二章一を参照)。

諸理論の系譜を文獻的継承関係の線上でのみたどらなければならないという理由はない。時代自身もまた理論を生むからである。わたくしみずからも、自分の学史研究をそういう狭い範囲に限定したことはない。しかし、モラル・フィロソファーだったスミスの『国富論』の場合、彼の労働価値論の生成の内的経路、この理論が彼のメンタル・ヒストリーのなかに占めた位置は、その文獻的系譜の探究とは別個の局面で考察することがとくに必要であろうし、逆に後者の作業の成果は前者の持つ意義や問題をきわ立たせるといえるであろう。

この事情は一見当然のことのように思えるが、わたくしはここから、『国富論』での労働価値論の樹立と、抛棄との理論的意義を再考し、『国富論』が経済学の有力な体系を最初に構築したというのはどうい意味であるのかを再吟味し、マルクス経済学と古典派・新古典派の経済学とへの開かれた体系であった『国富論』の学史的位置と意義ともういちど思いをひそめることが、有益であると考ええる。水田氏が『社会思想史の旅』のな

かでイギリスの学界について指摘している「経済学史と社会思想史との分裂」(四六ページ)は、こんにちの日本の学界でもいちじるしくなりつつあるようにわたくしは感じ、その現象が科学と思想との双方の衰弱をまねくであろうことをおそれている。内田義彦氏の『経済学の生誕』は戦後の学界に巨歩を印したが、わたくしはかつてその書評で述べたように、そこでは思想史上の新しい展望は(問題は残されているとしても)いちじるしく掘げられたにもかかわらず、理論史上の分析はかならずしもマルクス理論の前進に役割を果たしているように思われる。したがって、『生誕』の印象ぶかい「あとがき」は「イギリス経験論をのこりこえること、しかもそれを経済学の深みにさかのぼっておこなうこと」をみずからの深奥のテーマだと述べているけれども、一理論史家にすぎぬわたくしが『水田目録』のページをひるがえしつつ抱いた感想をいえば、今後の本格的なスミス研究は内田氏の課題としたところをいちだと深い文献的実証の基礎のうえに再吟味すべきであろう\*。イギリス経験論の深さと厚さと強靱さとは、われわれが容易にのりこえるものではなく、またのりこえてしまえばよいというものでもおそらくはないのである。

『水田目録』の出版と、その後に期待される完成——ことに『水田カタログ』としての公刊——は、社会科学の研究にしたいに多くのものをもたらし、学史・思想史研究の意義の大きさを証するような労作が生みだされる際の貴重な手がかりとなり

つづけるであろう。

(一九六七・一〇・二二)

\* ただし、内田氏自身の問題意識のその後のいっそうの深まりは、氏の新著『日本資本主義の思想像』に示されている。本稿の脱稿後にわたくしは同書を読んだ。